

次期中間処理施設整備事業の用地選定に関する意見書

平成25年10月29日提出

「用地の公募」であるので当然の議論の流れなのかもしれないが、広さや形、周辺住民の同意(の程度)など「用地の条件」だけを決めても、将来的に住民の理解を得ていくのは難しいのではないだろうか。

なぜならそこに「まちづくりの視点」がないから。

白紙になった前の計画は、焼却余熱というエネルギーを周辺地域の冷暖房に使い、CO₂排出を抑制することが「まちづくりの視点」だった。

これから公募しようとしている計画で、どんな「まちづくり」をしようとしているのか、条件整理の議論からはまるで伝わってこない。

余熱というエネルギーを、どう「まちづくり」に生かしていくのか、印西市や白井市の環境・エネルギー政策にどう関連させるのか、クリーンセンターの建替えは単体の問題ではないはずである。

もっと自由なビジョン、わくわくするようなアイデアを、広く市民に公募する形にしてはどうだろうか。余熱を事業に利用したいという企業の参加もあるかもしれない。地域の活性化につながるアイデアであれば、住民の理解・合意も得られるのではないだろうか。

ささやかな提案で恐縮であるが、余熱を利用した「市民ハウス農園」をつくってほしい。なかなか手のでないハウス栽培に市民が挑戦でき、技術指導者もおいてくだされば、全国から利用者が集まるだろうし、観光農園として活用してもよい。新規就農者を育てることもできる。植物工場の誘致をしてもよい。余熱を徹底的に農業に活用していく「まちづくり」である。

しかしながら、あたかも「余熱利用は高効率発電」に決まっているかのような発言もあり、委員会として何を公募したいのか、よく議論して進めてほしい。余熱をどのように生かすかによって必要な用地の条件も決まってくるはずである。

以上